



帯屋町アーケードで  
体育始め式

幅広い世代の約 240 人が参加し、とし1年の健康と飛躍を願って、新春の帯屋町アーケードを駆け抜けました。



北見市未来の農業担い手  
インターンシップ事業

北見市の高校生 2 人がインターンシップ事業として来高し、市内の農家の方との交流や収穫体験などに取り組みました。



筆山公園で草刈りなどの  
ボランティア

筆山を「桜の名所」として再生するため、約 200 人が参加し、桜への施肥や草刈りなどの作業を行いました。

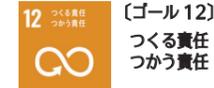


くらしの中の  
SDGs

Vol.36

クレームを  
上手に伝える

今月のテーマ



(ゴール12)  
つくる責任  
つかう責任

消費生活センターでさまざまな相談を聞いてみると、皆さんが自分の要望を事業者に伝えるときに、カスタマーハラスメント（カスハラ）と受け取られないように、とても苦労しているように感じます。カスハラとは、顧客や取引先などからのクレーム・言動のうち、要求内容の妥当性に照らして、「要求を実現するための手段・態度が社会通念上不当なものであって、手段・態度により、労働者の就業環境が害されるもの」をいいます。カスハラがまん延するとサービスや品質の低下など、消費者にとっても悪影響が出る可能性があります。消費者として、おかしいことに意見を述べることで、その意見が反映された場合に迅速な対応がとられること、これらは正当な権利です。

ただし、正当な権利の主張でも、伝え方を間違えるとカスハラと受け取られることがあります。クレームや意見をカスハラにしないためには、事業者の勘違いや互いの誤解を招かないようにコミュニケーションをとることが大切です。次のポイントを参考にしてください。

- ▼ひと呼吸おくと感情的な言動にならないように、気持ちを落ち着けてみましょう。
- ▼具体的に伝える…何をどうしてほしいのか、その理由を含め、相手に分かるように具体的に伝えましょう。
- ▼相手の話を最後まで聞く…一方的に話をしていませんか。相手の言い分や理由を最後までしっかり聞いて、理解するようにしましょう。
- ▼相手の立場を理解する…担当者の業務範囲や経験によっては、すぐに対応できない場合もあるかもしれません。
- ▼相手に敬意をもって接する…消費者も従業員も同じ「人間」です。行き過ぎた言動で傷つけないよう、お互いに尊重し合みましょう。

【問い合わせ】消費生活センター  
☎823-9433

「もしも」のときの豆知識  
防災ひとくちメモ

高知市にある救護病院をご存じですか？

「地震で自宅が倒壊してけがをした」「避難中に家族が体調を崩した」

そんな時、どこで医療を受けられるかご存じですか。

災害時はいつも通っている病院を受診できるとは限りません。市では、災害時に傷病者の受け入れを行う救護病院を21施設指定しています。これらの病院は、災害時に住民の命を守る重要な地域の医療拠点です。

救護病院は発災後、体制を整えば行政やその他医療機関と連携し、医療救護活動を行います。搬送される方や自力で来院する方を受け入れ、より多くの命を救うため、重症度や緊急性に応じ、優先順位をつけて治療を進めます。救護病院で対応できない場合は、より規模の大きな病院に受け入れを依頼します。

災害からあなた自身とご家族の命を守るため、まずはお住まいの地域にある救護病院を確認しておきましょう。詳しくは地域保健課HPをご覧ください。



詳しくはこちら▶



【問い合わせ】地域保健課☎822-0577

work of Kochi city  
市役所の推しゴト

くらし・交通安全課  
くらし・交通安全担当 編

こんな仕事をしています

- 01 交通安全運動・教育
- 02 自転車等放置防止対策
- 03 駐輪場の管理

Check!  
自転車の安全な運転と駐輪場の利用にご協力ください

詳しくはこちら▶



■ 自転車は近くの駐輪場に停めましょう

歩道や路上に放置されている自転車等は、通行の妨げとなります。市では、帯屋町周辺を自転車等放置規制区域に指定し、2時間以上放置した自転車等の撤去を行っています。なお、放置規制区域外では、公共の場所（歩道等）に7日以上放置した自転車等が撤去の対象となります。自転車等を利用する際は駐輪場に停めるようにしましょう。

ルールを守り、  
思いやりのある運転で  
安心・安全に！



【問い合わせ】  
くらし・交通安全課  
☎823-9487

「土佐紙業界の恩人」といわれる吉井源太は、伊野村（現いの町）に生まれ、ことしの三月で生誕二〇〇年を迎える。源太は八十年余りの生涯を伊野で過ごし、高知県のみならず、全国の和紙産業発展のために生涯をささげた。明治維新を境に時代が大きく動き、和紙を取り巻く環境の変化に向き合い、懸命に奔走していた様子は、残された日記からもうかがえる。

源太の最初の大きな功績は紙漉き道具の改良である。安政五（一八五八）年に江戸へ赴いた源太は紙の消費量を調査し、その多さに驚いた。「今の漉き方では需要に応じられない。品質を損ねることなしに今までの二倍、三倍の紙を漉けないか」と考え、二年後、土佐の大桁と呼ばれる紙漉き道具を完成させた。こうして生まれた「土佐の大桁」は、明治以降に源太らが開発した新しい紙が国内外で大量に求められる中、その需要に応える大きな力となり、紙業王国・土佐の礎を築いた。

また源太は、開発した道具や技術を独占せず、全国の産地に紙漉き技術やその改良法を積極的に伝え広めた。この行動に地元では「自分たちを不利にするのではないか」という声もあった。

しかし源太の日記には「万民の扶助」「日本の国益」「アジアの名誉」といった言葉が記されており、我が国の和紙製造業の発展、そしてその姿を世界に示すことを重視していたことがうかがえる。

源太のこうした姿勢と功績は、後の時代の研究者たちにも大きな関心をもって受け止められた。昭和を代表する和紙研究者・寿岳文章は昭和初期、全国の産地を訪ね歩いた。昭和十四（一九三九）年に吉井家を訪れた際には、「日本国中の紙漉き場を行脚して最も深く感じたのは吉井源太翁の影響であった。東北の山奥でも翁（源太）の写真を示す人がいた」と書いた色紙を贈っている。源太や伊野の職人たちが各地に与えた影響の大きさの一端がうかがえる。

源太が残した技術と志は、伊野から全国へと広がり、時代を超えて受け継がれてきた。我が国の和紙産業の発展に寄与したその功績は、今も和紙作りの現場に確かな影響を残している。



吉井源太  
(1826年-1908年)

歴史万華鏡

（158回）

全国に広がった技と志  
生誕二〇〇年・吉井源太の歩み

いの町紙の博物館

学芸員 田邊 翔